

あたためあうことばは紡がれたか

—「大阪国語教育アセンブリー2013」を終えて—

大阪府立今宮高校
国語科 小山秀樹

若い先生方とともに学ぶ、ワークショップのような会を開こうと、今宮高校で昨年からはまったこの会は、その趣旨に大阪府高等学校国語研究会、大阪府教育委員会の賛同をいただき、今年は110名を超える方々が集う、たいへん大きな会となりました。そのコンセプトは、「自主的」「参会者はことばの教育に関わるすべての人」「本質を問う」「若い先生方にやさしく」「おみやげを持って帰ってもらう（笑）」など、いくつかのことばであらわすことができます。大阪をはじめ、奈良、京都、兵庫からも参会いただきました。国語科教員のみならず、高校生、予備校生、大学生、出版関係者、一般の方々など、参加者はバラエティに富みます。みなさんの感想に目を通しますと、お集まりいただいた方々ひとりひとりが主体的な運営者となり、いきとどかない準備を補って、会を充実したものにしていたと感じます。

全体会では、「何のための国語教育か」という主題を設定しました。「何のための」は、「どのように」の前にあり、「どのように」を構想するいちばんの基礎になることを明確にするという意図がありました。この主題に違和感を感じられた方々もいらっしゃるかもしれませんが、2013年という現在において国語教育を考える際、「何のための」ということばづかいが、課題意識をあらわす一番適切な表現であると考えます。当日は「国語力」をめぐる鮮烈な問題提起が予備校生から出されました。議論が深まる前に、残念ながらタイムアウトとなりましたが、教える者＝教えられる者が、普段の立場を離れて対話する試みとなりました。

分科会は5つ準備しました（ライトノベル分科会は次年度に期待となりました）。全体会のテーマである「何のための」は、指導者、学習者の「教材の発見」によって実際の学習の現場で生命を得ます。参会いただいた方々ひとりひとりが「何のための」と「教材の発見」に向き合ってくださいました。それぞれの感想から読み取れます（アップされている参加者の感想を是非お読みください）。複数の分科会に出たかったというご意見も多数いただきました。5つの分科会は独立したものであるだけでなく、互いに関わり合うものであるという示唆をいただきました。

ことばの教育をめぐる課題は、その時代の反映という点で常にリアルタイムな課題です。その課題は焦点を定めることが困難で、課題解決の処方箋が広く喧伝されるころには、その課題はすでにかたちを変えています。ことばの教育が何らかのかたちで次世代のことばの生活に資することがあるとすれば、教える者＝教えられる者がその時代の課題をことばでとらえ合い、課題を切り開く可能性をことばで求め合うことから生まれると考えます。ことばの教育の可能性は、とらえ合い、求め合い続ける教える者＝教えられる者の現場にあります。大切なことは、求め続けること、教える者＝教えられる者が、対話し続けることではないでしょうか。

国語の授業がことばによる対話をその内容に含んでいる以上、むずかしく、うまくいかないことが多いものです。それでも、ことばの課題と向き合いながら実践し続ける。その姿勢を確かめ合う。話し合い、発見のよろこびを分かち合う。そして互いにあたためあうことばを紡ぎ合い、そのことばを勇気とする。参加者のみなさんの真摯な発言と感想に支えられ、「大阪国語教育アセンブリー」は、来年を迎えたいと思います。